

Projects 2021

2021年も全国各地で様々なプロジェクトに取り組むことが出来ました。
お世話になったみなさん、ありがとうございました！



◀なんば駅周辺 まちづくりプロジェクト

なんば駅周辺の歩行者空間化の社会実験「なんばひろば改造計画」が5年ぶりに実現！バス、タクシー、荷捌きなどの交通再編による影響と休憩スペースとしての広場の在り方を検証しました。地元の熱い想いが一歩一歩実現へと近づいています。

プロジェクトの詳細は
コチラよりご覧ください→



New Projects



山口駅通りまちなかウォークアブル
推進プロジェクト



松本城三の丸エリアビジョン
策定プロジェクト



飯田・リニア駅周辺
ブランドクリエイティブプロジェクト



気仙沼まちなかエリア
未来ビジョン策定プロジェクト

Ongoing Projects



豊田市都心地区広場の
計画・運営プロジェクト



「久御山まちなかにわ構想」プロジェクト



西梅田地区におけるエリアマネジメント
推進プロジェクト



姫路ウォークアブル推進プロジェクト



姫路・大手前通魅力向上プロジェクト



神戸・名谷駅駅前空間活用プロジェクト



シェアハウス・みかん荘

受賞

- ふるさと名品オブ・ザ・イヤー実行委員会
「ふるさと名品オブ・ザ・イヤー」地方創生大賞
(長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト)
- 「都市景観の日」実行委員会 (国土交通省後援)
「令和3年度都市景観大賞」優秀賞
(長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト)
- 一般財団法人都市みらい推進機構 (国土交通省後援)
「令和3年度土地活用モデル大賞」審査委員長賞
(morineki (北条まちづくり) プロジェクト)
- 公益社団法人土木学会景観・デザイン委員会
「土木学会デザイン賞2021」最優秀賞
(長門湯本温泉観光まちづくりプロジェクト)

News

2021

New Crew

3人の新メンバー入社！

新卒新入社員の永木、JR西日本からの出向社員の古庄、中途入社社員の新津が加わりました。

Renewal

HPリニューアルオープン！

約10年ぶりにHPがリニューアルオープンしました。
弊社の取り組みや関わるプロジェクトについて、より詳しく紹介しています。

New Challenge

有賀が長門湯本温泉にて365+1ビールの醸造&販売を開始！▶
メンバーの有賀が長門湯本に家族で移住し、クラフトビールの醸造と販売を始めました。



Heart Beat Letter

Have a Great New Year!

No.1

#2021.12



好きだと思えるまちがある

——わたしの「やりたい」が誰かの「楽しい」になるまちへ

2021年、都市デザイン事務所・ハートビートプランは新しいビジョンを決定しました。
思いを持った人がやりたいことを実現し、それが誰かの日常を彩り支える「楽しみ」になるように、そして「好きだと思えるまちがある」ことが、
ごく当たり前の価値観になるように、ハートビートプランはまちの皆さんと一緒に、そんな世界の実現を目指していきます。



hbplan.jp

Heart Beat Letter

No.1 #2021.12

ハートビートプランメンバーの

「好きだと思えるまちがある」

2004年5月 泉1人から始まったハートビートプランも、現在では10人に。ここで改めてメンバーそれぞれが「好きだと思えるまちがある」をテーマに語ります。



好きだと思えるまちがある

このフレーズは、我々の事務所がめざしたい世界を一言で表すとどうなる?という問いから生まれた。メンバー全員から複数のフレーズが出され、その中でこれが一番いいね!と決まったのだが、提案したのは当時の新入社員というのが嬉しいなあ。



人には人格があるが、まちには人格のようなものがないといわれる。しかし、私がこの仕事に就くことになったのは、多くの人が活動した結果の現象だと思っていたまちで、自らまちにコミットして少しでも身近なことを楽しく、誇りに思う人たちと出会ったから。そんなことに関わる仕事があると知ったから。

このようなきっかけを感じるアンテナと自らも動くエンジンをもって、この世界観を拡げていきたいなあと思う。

代表取締役 泉 英明



誰もが「ここに居ても良いよ」と言われる街

私にとって新宿・歌舞伎町は、20代の10年間を過ごした思い出の強い場所。一般に連想される「風俗」や「危険」という側面が強いのも事実だが、一方で様々な理由でこの街に辿り着いた人々を受け入れてくれる場所でもある。それは決して暖かな歓迎ではなく、都会的な他者への無関心ゆえであるし、誰かが助けてくれるわけでもない。それでも、今の日本でこれだけ寛容な街はなく、決してポジティブな意味だけではない社会の「多様性」を体現している街でもある。



私たちは「都市をデザインする」という仕事をしているが、それは完成された美しい環境を作るのではなく、多様な人がその街に受け入れてもらえる「寛容性」を守ること、誰もが「居ても良いよ」と言ってもらえるような「余白」を残すことだと思う。自分の仕事を通じて、そういう感覚を多くの人と共有することを大切にしていきたい。

取締役 園田 聡



Timing、Feeling、Happening

「旅するスナックしおり」は、スナック(私とカウンターがあれば、そこはスナックしおり)を街中の隙間で開催する個人的趣味活動。この活動を始めてから、「ここでスナックやったら面白そう!」と妄想したり、「〇〇でスナックしない?」と声をかけてもらったりなど、街の見方が変わってきているし、私自身も今までより街を楽しんでいる。こういう楽しい妄想ができる隙間・空間がたくさんあることが、楽しい街、なんじゃないかな。



街をダイナミックに変える事業的な妄想から、ここで晴れた日にピクニックしたいなというゆるやかな妄想まで、色々あった方が楽しい。街中で開催するときに思うのは、私の想像・コントロールできないことがたくさんおきること。予期できないハプニングは楽しい。Timing、Feeling、Happening。恋の3大原則を思い出したけど、2022年こそはスナックしおり再開させたいなあ。 岸本 しおり

時々、意識すると楽しい

美味しい、暑い、欲しいとかの感覚と違って、「まち」のことを意識することはほとんど無いと思う。たいていは、人生の転機だったり、何かの開発の一部になったり、悲しい災害だったり、急に無理やり意識させられる存在で、普段から「まちが好きだ」と力強く感じている人は、そんなに多くないと思う。いつも日常にあるのは、それぞれの人、もの、お店、仕事、土、木、水……



ではあるけれど、時々、それを味わう時間をぐっと引き立て、いつもの美味しい、暑い、欲しいを、一段も二段も味わい深くしてくれる、背景みたいな存在がある。「まち」は時々、そういう役目をすると思う。「好きだ!」というより、そんな瞬間にほわっと「好きだと思える」対象に、「まち」がいたとしたら、少し豊かな日常が待っている気がしながらも、そんなことはうまく表現できず「まちづくりの仕事してます!」と語っています。

木村 隼斗

まち=自分の家のニワ

「自分の家のニワのように、まちに愛着と関わりを持ちながら暮らす」

そんな暮らしの雰囲気が見えたらまちが僕は好きだ。

そう思うようになったきっかけは一年間留学したイタリアでの生活である。イタリア人は、必ずまちに行きつけのカフェやチーズ屋さんなどがあるし、道や広場のそこかしこでくつろぎ談笑しているし、まちや政治について(ときにしつこく)議論をする。まるで自宅のニワのように、愛着をもって真剣に接している。



一方日本では、広井良典が「日本社会における「家」の「垣根」とヨーロッパにおける「都市」の「城壁」がパラレルな存在」というように、自分ごととして捉えるまちの範囲がヨーロッパよりも狭く、関心も薄いように感じる人が多い。日本でもまちとの関わりしろがもっと広がっていくとよいなと思うし、自分の実践においても大切に考えていきたい。

新津 瞬



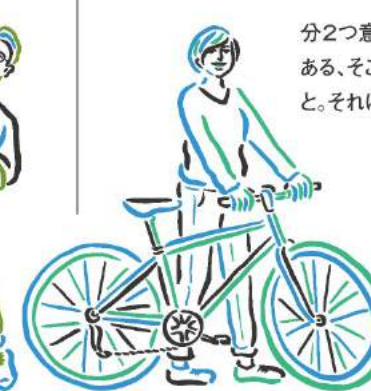
後押ししてくれるまち、受け止めてくれるまち



今年のHBPの研修で私は「大阪で行った&行きたい場所の地図」を作った。それを通じて自分の好きなまちの要素を明らかにしようと試みたが、それほど規則性もないし、振り返るとブルーな気分で行った場所も同じくらいよく思い出す。

「好きだと思えるまちがある」とは、今の私には多分2つ意味がある。一つは、自分がまだ想像できない世界がある、そこで生きて、何かを生み出している人たちに会えること。それに心は惹かれるし、知らなかったことが染み込んでいく感覚が自分がスポンジのように思えて面白い。もう一つは、元気なときはもちろんそうだが、逃げたいと思えるまちがある、ということ。好きだ!という気持ちを後押ししてくれるだろうか、逃げたい!と思う気持ちを受け止めてくれるだろうか。それを両立できる無限大の可能性を秘めているのが、まちなんじゃないかなと思っている。

田中 咲



ミッドナイトセレンディピティ

好きだと思えるまち。そう聞かれると、ここが良いなあ、あそこも良いなあ、と、いくつも思い浮かんで消えていくけれど、自分はまちの何が好きなのだろうか。

好きになる色々な要素が街にはあるけれど、やはり思い浮かぶのは、曾我部恵一のキラキラという曲の「ビデオ屋の帰り、夜の街きれいだっただ。偶然誰かに出会うような気がして、ちょっとドキドキする」という一節。

誰かに会うかもしれない、何かがあるかもしれないという、予期せぬ出会いがありそうなまちや場所が好き気がする。そしてそれは別に素敵な出会いだけでなく、良いのだ。

特にそれが真夜中にまちを歩いている時に感じられると、素敵なドキドキ感とよく分からない幸せな気分になる。だから、ミッドナイトセレンディピティ。

でも、これってきっと都市にだけあるものではなくて、突然鹿が出てきたり、雲間から月が顔を覗かせたり、そんな瞬間も自然との予期せぬ出会いなのかもしれないと、最近都市を離れて暮らし始めて思う。

そう考えると、どこでも楽しく生きていける気がする。

取締役 有賀敬直



祖母の上海、私の上海

98歳で亡くなった母方の祖母は、戦時中に上海で、デパートのエレベーターガールをしていたらしい。敗戦後、祖父と共に引き揚げ船で必死に帰国したのだと子どもの頃に聞いた。

私が大学生になって上海を訪れた時、まちの写真をたくさん撮り祖母に見せた。ライトアップされた外灘の写真をみながら「きれいだね」と目を細めた祖母はこう続けた。「でも、私の上海は、もっともっときれいだっただ」。

祖母には祖母の上海があった。それは時の流れに洗われ、歩んできた人生のフィルターを通して唯一無二の上海であった。そして同様に、私には私の上海があつて良いのだとその時に悟った。

喜怒哀楽のようなものであれ、誰かの生きてきたフィルターを通して語られるまちの姿はとても美しい。まちは膨大な記憶の集合体だとも思う。それぞれの美しい「あの日のまち」が重なり立ち現れるまちの姿は、今を生きる私たちへの圧倒的なエールであり、「これから目指したいまち」の姿と不思議と似ていたりもする。

あなたが憶えている、そのまちのことが、私はとても好きだ。

山田 友梨



譲れず住み続けている京都

私の好きなまちは事務所唯一の電車通勤者になれども譲れず住んでいる京都です。鴨川や寺社仏閣のパブリックスペースはもちろんですが、幅広い規模感のお店がたくさんあることも大きな魅力です。天下一品やイノダコーヒーの全国的な大手チェーンにはじまり、セカンドハウスや進々堂、志津屋、東洋亭の中規模チェーン、さらさ、グランディールや、前田珈琲などの小規模チェーンなどチェーン店の規模もさまざま。そして個人店はそれぞれが独自のネットワークを持っていて、個人店同士がお互いにお客さんになる関係性を築いています。常連客もそれに惹かれて同じネットワークにいることも多いです。

コロナ禍で観光産業が落ち込むなか、京都が生きているなど感じるのは、そんな幅広いお店が成り立つような環境がまちの素地としてあるからかなあなんて考えてます。

永木 遥



役割の境目が溶けていく空間

理想のまち/空間ってどんなところなのでしょう。自分も何度か考えたことがあるのですが、なんとなく「こういうところが良いな」というイメージはあるものの、うまく言語化できずにおりました。しかし先日、「行きつけの焼き鳥屋で居心地良いよね」という話を聞いた際に、はっと考えが繋がりました!

つまり、行きつけの店が心地良いのは、接客をする「店員」と、食事をする「客」という、堅い役割の構図が溶けて、会話を楽しんだり、常連同士で仲良くなったり、店に多少のわがままを聞いてもらえるようになったり…と、過ごし方の幅が広がるからだと思うのですが、同じことがまちづくりや場づくりでも言えるのではないかとこのことです。まち/空間を「つくる側」とか「つかう側」とか、そういう役割の境目が溶けて(構造主義でいうところの二項対立を脱構築する感じ)、それぞれがまちや空間を使いこなすアイデアを持ち寄り、思い思いの時間を過ごせる。そんな空間こそが、居心地が良く、理想的な空間ですな。

そんな、行きつけの「まち」を、2022年は探していきたいです!

古庄 大樹

